

女神の娘の夜伽

伯爵令嬢レイティナの純潔

は領民のために散る

中年用務員が異世界で
高貴な子宮を墮とす

— 成人向け —
R18
ADULT ONLY

18歳未満
購入・閲覧禁止

目次

第一話	伯爵令嬢レイティナ.....	3
第二話	伯爵令嬢の口唇契約（♡∴フェラチオ）.....	14
第三話	伯爵令嬢の初夜①（♡∴クンニ）.....	23

第一話 伯爵令嬢レイティナ

「おねがいました。村人が冬を越すには伯爵様のご慈悲に縋るしかないのでございます」

麦の収穫が終わった秋の午後。辺境の小村であるカルムの代官屋敷で、日に焼けた老人が必死の陳情をしていた。白髪頭を下げる村長の前では、若く美しい令嬢が座っていた。

しっとりとした輝きのセミロングの金髪、アーモンド形の大きな目と青い瞳。白いドレスに包まれた細身の肢体は形のいい胸とお尻の綺麗なラインを描く。まさに清楚可憐な姫君というのがふさわしい。実際、王都の社交界では美姫として知られ、十八歳の年頃とあっては多くの求婚者を引き付けていた。

だがこの辺境村にあって、令嬢は厳しい表情を浮かべ、差し出された帳簿に真剣な瞳を注いでいた。カルム村の領主であるセルウィン・伯爵の娘レイティナ・セルウィンドは、父の代理として領地の差配を預かる身なのだ。

「すでに干ばつのことで税の軽減をしております。わたくしとしては他の村との公平を考えなければなりません」

レイティナは帳簿を村長に向けた。そこには彼女自身の優美な筆跡で多くの数字と文章がならんでいる。伯爵令嬢は白い指でその一行を指しながら、冷静な声音で指摘した。

「重々承知しております。例年であれば不作年は村総出で山の果実を集めて冬の蓄えとします。ですが今年は近隣で魔物が出たためそれもままならず」

「なるほど。確かに困難な状況が重なったことは考慮せねばなりませんね……」

レイティナは頷き、サファイアの瞳をもう一度帳簿に落とした。金髪を掻き揚げページをめくる横顔は真剣ながら可憐そのものだった。聡明にして慈悲深い姫、領民から女神のように慕われる領主代行、それがレイティナだ。

遡れば王家につながる名門伯爵家の長女として生まれたレイティナは、母譲りの金髪と父譲りの碧瞳の美少女だった。十五歳で社交界にデビューするや多くの貴公子の注目の的となる。だが社交界に入れたんだ母親を見てきたレイティナは、華やかな貴族同士の付き合いに決して深入りしなかった。

レイティナが力を注いだのは領地の仕事だった。騎士団長として忙しい中でも愛情を注いでくれた父に褒められたいという思いから始めたことだが、生来の聡明さ、そして何より領民の訴えに真摯に耳を傾ける責任感ある態度で、彼女は多くの領民から慕われるようになったのだ。

そんなレイティナの悩みは近年増加している魔獣の被害だ。辺境での魔獣の発生が増えているにも関わらず王宮の反応は鈍い。限られた予算で少しでも多くの領民を救うために、レイティナは自ら村々を回り陳情を聞いていた。

今回のこのカルム村への視察もその一環だ。

「事情は理解しました。領主代行として食料援助を約束します。冬が来る前に届くよう手配しますの
で皆を安心させてあげてください」

「ありがとうございます。姫様のご慈悲に村人を代表してお礼申し上げます」

深く頭を下げる村長。レイティナは「私はあくまで父の代理ですよ」と優しくたしなめた。

「レイティナ様、村長、お茶をどうぞ」

「ありがとうアン」

話が落ち着いたのを見計らうように、栗毛のボブカットの侍女がお茶を出した。お気に入りの茶葉の香りにレイティナは微笑みを浮かべた。領主代行としての凛とした表情が、年頃の娘らしいあどけなさにかわる。

村長が「どこそこの家で子供が生まれまして」と村の近況について話をする。レイティナはほほえみを浮かべながらそれを聞く。代官屋敷に平穏な空気が流れた。

だがそんな穏やかさは長く続かなかった。あわただしい足音が代官屋敷に近づいてきたのだ。ドアが開き、青い顔をした男が駆け込んできた。

「そ、村長大変だ！！ あっ、レイティナ様御無礼を」

「随分と慌てているようですが何かあったのですか」

村人のただならぬ様子に、レイティナは報告を優先させる。

「は、はい。実は薪を集めていた者が山奥で大きな足跡を見つけたと言っているのです」
「なんだと。熊や猪ではないのか」

村長の問いに若者は大きく首を振った。館の空気が凍り付いた。魔獣は土地の瘴気が野生動物に宿

り生まれる。極めて凶悪で、人間を好んで食らう。ただし瘴気を使い果たすと存在を維持できないという弱点を持つ。つまり今年はすでに魔獣が発生したこの村は当面安心のはずなのだ。

逆に言えば立て続けに魔獣が発生したということは、瘴気が強力であることを意味する。これは辺境でもめつたにないが最近そんな事例が徐々に増えていた。隣の侯爵領では領主の無作為も手伝って村がいくつも魔獣に滅ぼされるという痛ましい被害が出ている。

巷では魔王復活が近いのではという不穏な噂も飛び交い始めているくらいだ。

「レイティナ様。伯爵様の騎士団は来ていただけるでしょうか」

「……父は今東部で魔獣を討伐中のはずです。今から知らせても到着までに四日かかる距離です」

「なんということだ。なぜこんなに立て続けに魔獣が……」

「今は不運を嘆いているわけにはいきません。少しでも早く避難を開始しましょう」

レイティナがそう指示した時だった。村の門の方から「魔獣が出たぞ!!」という悲鳴が聞こえた。

………

「そんな三つ目狼なんて」

館から出たレイティナは村に向かって近づいてくる牛くらいの大きさの狼に絶句した。騎士団ですら討伐に苦勞する魔獣だ。しかもおり悪く畑の手伝いから戻ってきた子供がちょうど門に向かっていった。

へたり込んだ子供にまがまがしい瘴気をまとった魔獣がとびかかった。大きな罅が哀れな子供を飲み込もうとしたその時、

「やれやれ。いきなり荒事かよ」

『ギャンッ！！』

両者の間に一人の男が割り込んだ。男は手に持った両刃斧を無造作に振り、三目狼を吹き飛ばした。地面に転がった魔獣は瘴気を吹き散らしてもがいている。男は巨大な魔獣を足で踏みつけると、斧を振り下ろした。

『ギョオオオオオオー！』

魔獣の断末魔が響いた。少し遅れて村人の歓声が上がった。

………

「なんだ領主の住処ってわりに質素だな」

代官屋敷に入ってきた中年男は部屋を見渡してぶっきらぼうに言い放つと、テーブルに足を投げ出すようにして座った。先ほど村の前で魔獣を屠った男だ。ヘイゴという名で、旅の傭兵だという。

レイティナよりも頭一つ高い男としては平均的な身長。たるんだ腹と脚が短い体型はお世辞にも褒められるものではない。ヘイゴという聞きなれない名前と黄色い肌は別の国の出身らしい。

ただ声に異国訛りはなく、乱暴だがしっかり聞き取れる王国語で話している。

「いかにお手柄とはいえ領主館にその物言いは無礼ではございませんか」

「いいのですアン。ヘイゴ殿でしたか。まずはお礼を申し上げます。村の子を守っていただき感謝します」

レイティナは侍女を抑え、穏やかな笑みで礼をいった。

館は貴族の象徴であり、代官屋敷であっても侮辱することを許せば権威が傷つく。レイティナが滞在しているとすればなおさらだ。アンは言うべきことを言っただけだ。ただ今は形式を守っている場合ではないとレイティナは判断した。

微笑みを浮かべながらも、レイティナの青い瞳は目の前の男を観察している。

傭兵とは報酬と引き換えに魔獣と戦う者だ。村にいられなくなった荒くれ者や兵士崩れが多く、前科者も珍しくない。彼女の父が魔獣退治の補助として雇った時も、命令にはろくに従わず街の女に絡むなど好き放題していたという。

実際、目の前の男の粗暴な態度と乱暴な口調は父やその部下のような騎士とは全く違う。それでも凶悪な魔獣がすぐそばまで近づいている以上、この傭兵が村にとって唯一の戦力だ。村を滅びから救うためになんとしても交渉を成功させなければならぬ。

「ああ、さっきは自分の身を守ったついでだ。降りかかった火の粉を払うってやつだな」

異国の諺だろうか。不思議と意味が分かる。てっきり褒美を要求すると思ったがそれをしない。見た目と違って道理が通じる相手かもしれない。レイティナはそんな希望を持った。

「では改めて。私はこの村の領主代行として傭兵殿にお仕事をお願いしたいと考えています」

「そうだな、これからのことは話が別だ。俺の腕は高いぜ」

傭兵は毛むくじらの腕を叩いた。

「正当な報酬をお約束します。傭兵殿には騎士団が到着するまでの四日間、村を魔獣から守っていたきたいのです。一日当たり金貨四枚でいかがでしょうか」

金貨一枚は贅沢しなければ平民一人が一ヶ月暮らせる額だ。つまりこの仕事を受ければ一年以上は何もせずに暮らせることになる。魔獣討伐や復興に多くの金を使っているセルウィンド家は余裕がない。王都の出入り商人に借金をせねば出せない金額だった。

それでもこういう時は最大限の誠意を見せるのがレイティナの流儀だった。

「へえ、村人の命ってのは結構高いんだな。だが払えるのか」

男は感心するように言ったが、その目は質素な部屋を見まわしている。

「そうですね。後払いという形にさせていただきます。むろん領主代行として契約を結ばさせていただきます」

レイティナは右手中指の指輪を前に出した。伯爵家の家紋が刻まれた印章を兼ねている。簡単な通信も可能な魔法がかかっており、父との連絡もこれで行うことができる。

「話にならないな。領民の為に大金を出すってのはご立派だ。だが俺はどうなる。魔獣との戦いは命懸けだぜ。将来の褒美を積まれてもしかたねえ」

「もし万が一ですが。貴方に不幸があれば当家は責任を持ってご家族に」

「家族なんていねえ。言ったとおりだ、一日金貨百枚でもお断りだね」

「……ではどのような報酬ならばご納得いただけますか」

男の言葉はあまりに刹那的だった。全く違う価値観に戸惑いながらレイティナは条件を聞いた。男は気持ち悪い笑みを浮かべた。

「明日死ぬかもしれない男が欲しがるものなんて一つだろ。あんたの身体は金貨よりずっと価値がありそうだ」

無遠慮な視線がレイティナを襲う。首筋から胸元を探り、腰から臀部まで撫でるいやらしい目。全身を値踏みするようなおぞましい感覚だった。

「そ、それはいったいどういう……」

「村を魔獣から守る対価として俺の夜の相手をしてもらおう。騎士団が到着するまで毎晩。これが条件だ」

「いくら何でも無礼な要求です。……女をお望みならわたくしを」

予想外の言葉に思わず固まったレイティナだが、アンという言葉に我に返った。

「待ちなさいアン。ヘイゴ殿、別の形では駄目でしょうか。父は騎士団の長です。今後のあなたのお仕事に必要な便宜も妥当な範囲であれば――」

「俺はこのまま出て行ってもいいんだぜ。どうせなら夜のうちに危険な場所から離れたいからな」

レイティナの提案は簡単に切り捨てられた。魔獣は夜の間に瘴気を吸収して昼間に活動する。夜の旅は魔獣に関しては安全性が高まるのだ。逆に言えば村にとって猶予は明日の朝までしかない。

レイティナは窮した。

今日会ったばかりの中年男に身体を差し出す。伯爵家の令嬢としてはあまりに受け入れがたい要求だ。だが拒否すればどうなるのか。

百人を超える村人の命を守るためにはこの男の力が必要。魔獣との戦いが命懸けだという主張にも道理を認めざるを得ない。

（わたくし一人の身で済むなら受け入れるしかありませんね）

レイティナは内心覚悟を決めた。ただそれでも問題があった。

「契約は双方の納得が必要です。……傭兵殿の条件に応じれば私はたった一つしかないものをあなたに差し出さなければいけません。失礼ですがその後のことはどのように保証すれば良いでしょうか」

「たった一つ？ ……ああなるほどつまりあんたは処女ってわけか」

「ッ。……そうです」

恥辱に耐えてうなづく。

殿方が処女を喜ぶということはレイティナも知っている。純潔を交渉にのせるなどあんまりだが、領主代行として交渉しなければならぬのだ。

男は少し考える顔になった。

「確かに処女だけ食われて逃げられちゃかなわんか。よし、じゃあこういうのはどうだ。今夜は手付けってことで口で相手してくれればいい。あんたの処女をいただくのは明日の夜。これでいいだろう」

「それは………」

譲歩ともいえない卑猥な要求にレイティナは口を閉ざした。だが男は「さあどうする？」と腰を浮

かせる。今にも出て行くというあからさまなポーズだ。

口で男に奉仕するなど処女を失うのと変わらない恥辱だ。ただこの男が自分の純潔を欲するなら、少なくとも明日は村を守るはずだ。

それに先ほどは契約したわけではないからと報酬は要求しなかった。ここまでのやり取りでも約束を守る姿勢は見せていた。

（さきほど村の子を守ってもらった代償と思えば……）

「了解いたしました。その条件で契約いたします」

レイティナはついにうなずいた。

「なりませんレイティナ様！ 傭兵殿、私ならば今宵からでも夜伽を――」

「ダメですアン。これは領主代行としてのわたくしの決定です。ただしヘイゴ殿。あなたにも一つ約束していただきます。夜伽のお相手はわたくし一人だけ。アンも含め他の者には決して手を出さないと誓ってください」

これだけは譲れない、その決意を籠めてレイティナは条件を加えた。

「ああいいぜ。伯爵家のお姫様に相手してもらえるってのに無駄撃ちしてられねえからな。じゃあ早速手付けをもらおうか」

中年男はあっさり頷いた。そしてガラガラとした雄の目でレイティナを見る。

「二階にわたくしの寝室がございます。そこで」

レイティナはそう言うと言を上げた。平吾は「いい覚悟だ。そそるぜ」と立ち上がった。震える足

を叱咤しながら、レイティナは階段へ向かった。

第二話 伯爵令嬢の口唇契約（♡..フェラチオ）

蝋燭が木と漆喰の空間を照らしていた。代官屋敷二階の部屋は素朴で飾り気がなく、高貴な娘の寝室であることを示すのは壁際におかれた姿見と真っ白なベッドのシーツくらいだった。

くぷっ、くちゅ、くぷっ、くちゅ……

シーツに規則正しく揺れる影が映っていた。

白いドレスに身を包んだ清楚な姫が床に跪き、しっとり輝く金髪を揺らしながら、可憐な唇で懸命な奉仕を行っているのだ。その美しい顔は生まれて初めての口戯のおぞましさに耐えている。

美貌の伯爵令嬢の奉仕を受けるのはベッドに腰掛けた中年男だ。尊大に股を広げる男の顔は高貴な唇を穢す悦びに歪んでいた。

くぷっ、ちゅー、くちゅ、くちゅ、はぷっ……

（色街ではこのような作法があることは聞いていましたけど……）

あまりにはしたくない自分の行為にレイティナは震える。生まれて初めての男性器は、想像よりはるかに大きかった。唇を圧する赤黒い肉根、その先端は槍のようにエラが張った凶悪な形状だ。

実はレイティナが受け入れさせられているペニスは、この世界では娼婦も慄くサイズなのだが、処女の身では知る術がない。彼女に分かっているのは契約の為にはこのおぞましい肉根を満足させなければならぬということだ。

くぷっ、くちゅ、くぷっ、くちゅ。

「い、いかがでしゅか……ング、ンツ、ンツ……」

醜惡な肉棒に従順に唇を差し出すレイティナ。屈辱と汚辱に耐える青い瞳はそれでも気高さを失っていない。

領主代行として村人を守るという決意が彼女を支えているのだ。

「くくっ。貴族のお姫様ともなりやこっちのお作法もお上品なことだ」

目の前に跪いた金髪美少女に平吾は言った。言葉は不満気だが、その下卑た顔は伯爵姫の唇のバーズンを奪った喜びを隠し切れない。劣情の高まりに反応してペニスがギンッと硬さを増し、乙女の喉を突いた。

「……ッ！ んっぐ。ごほッ。……はあ、はあ……」

「おいおい、しっかりやってくれないと契約はなしだぜ。お父様の騎士団がくるまで待つのか？」
えづくように咳き込んだレイティナに容赦ない叱咤が飛んだ。

「待ってください。ご満足いただけるよう努めますから」

「じゃあ誠意を見せろ。唇だけじゃなくて舌もしっかり使うんだ」

「ーッ、……はい。わかりました」

レイティナは口を開き、ペニスを深く咥えた。熱い肉塊を唇で締め付ける。怯える舌を伸ばしてペニスの下筋をなでる。先ほどこえずついた喉まで差し出し必死に口を動かす。

ちゅるっ、れろ…れろ、ちゅるっ、ちゅうっつ、れろっ。

「おおいぞ。やればできるじゃねえか」

下劣な賞賛にレイティナの白磁の頬が赤く染まった。ベッドに置いた左手がシーツを握りしめる。それでも十八歳の生娘は奉仕を続ける。領民を守るためと心に言い聞かせながら。

ちゅぷっ、ちゅっ、ちゅう、れろ、れろっ、ちゅぷっ

舌で亀頭をペロペロと撫でる様にする、同時に唇で肉幹の根元を締め付けてこする。熱い隆起がさらに猛々しさを増した。ビクッ、ビクッという肉の脈動が口内で暴れる。先端から出る苦い液体が口の中を犯していくのをレイティナは必死に我慢した。

「おおっ！ いいぞ。よしよし、高まって来た！」

「んぐッ！」

レイティナの小さな顔を太い両手が掴んだ。男は絹糸のような金髪を掻き抱くと、可憐な口に乱暴な挿入を送り込む。男がその欲望を満足するためだけのイラマチオが始まったのだ。

「おぐっ。やめへえ、くだふあ、うぐっ。おぐっ！」

「がまんしろ。ああいいぜ。そうだそうやって舌を絡めるんだ」

「おぐっ、ふぐっ。ひゃ、ひゃい。ほれいいいれすか……おぐ、じゅっ……」

にじむブルーの瞳で懸命に尽くすレイティナ。欲望に歪んだ悪鬼の如き男は狼藉をやめない。諦めて口内を差し出すしかなかった。脈打つ太幹に唇を這わせ、喉を突かれても吐き出すのを我慢する。

レイティナの長いまつげに涙が煌めいた。それでも彼女は契約を勝ち取るため陵辱に耐えた。

レイティナの口の中でさっきとは比べ物にならないほど激しくペニスが跳ねた。火傷するほど熱い肉根がビクビクと震えた。そして、

「うおっ、で、出るー！！！」

「んっ！！　んっ……ん、んっ。んんッー！！！」

ドピュ、ドピュ、ドピュドピュ、ドクッ、ビュク、ドク、ドク、ドク……！！

レイティナの口内で男の欲望が決壊した。熱くてドロドロとした精液がレイティナの口の中にあふれた。十八年の生涯で味わったことがない生臭い味が清純な口腔粘膜を侵していく。

「ああきもちいいぜ。おお、まだ出るぞ。そうだ、しっかり吸い取れ」

「うぶっ。はひ……ほ、ほうれすか……ジュール、ジュール」

ギョツと目をつぶり、次々と送り込まれる精液を何とか受け入れるレイティナ。腰を突き出したまま快感にブルブルと震える平吾。おぞましい吐精が高貴な口を余すところなく穢し尽くした。

「あー気持ちよかったぜ。はははっ、初めてにしちゃ出来だ」

レイティナにとって永遠と思える時間の後、ペニスの震えがようやく止まった。次の瞬間、鼻腔をむせるような栗の花の匂いが襲った。未だに自分の頭を驚掴みにする男を見上げる。涙の溜った碧瞳で「わたくしは務めを果たしたはずですよ」と訴えた。

キスも知らない清らかな唇による懸命な奉仕を行い、下卑た欲望を最後まで受け止めた乙女のせめもの願い。レイティナが知るはずもないがフェラチオ後に精液を吐き出すことは娼婦にも許される権利だった。

「飲めば契約完了だ」

だが返ってきたのは無慈悲な言葉だった。上目遣いで慈悲を求めるが、男の表情は変わらない。レイティナはぎゅっと目をつぶった。

コク、コクつと細いのが鳴り、ねばつく汚液が伯爵姫の喉を通過していく。

喉に絡みつく精液に耐えながら、レイティナは要求通りに全ての精液を嚥下した。涙目で男の表情を窺う。尊大な領きを確認してから唇を離れた。

「うっ。ごほっ。ごほっ。はあ、はあ……。こ、これでよろしいですか」

「ああよかったぜ。いいだろう明日からしつかり魔物と戦ってやるよ。だからわかっているな」

「はい。あなたが村を守ってくださいる間、わたくしが夜伽を務めさせていただきます」

こぼれそうになる涙を抑えてレイティナは答えた。高貴な伯爵令嬢と下卑た中年男の夜伽契約が成立した。

………

「最高だったぜ。フェラだけでどれだけ搾り取られたって話だ。信じられねえくらい整った顔に華奢なのに出るところは出た身体。ありえねえほど白い肌。おまけに貴族の姫様ときた。日本じゃまずお目にかかれない上玉だ。おまえの誘いに乗った甲斐があったってものだ」

二階でレイティナが必死に口をゆすいでいる頃、一階の客間に移った森田平吾はベッドに寝転がり、天井に向かって捲し立てていた。

傍から見たら独り言を言っているようにしか見えないが、彼の視線の先には暗い渦が見えている。

【こんなことで満足されては困るぞ。お前の役目はあの娘の子宮に宿る聖なる力を失わせることなのだからな】

低く冷たい声が平吾の頭の中に直接響く。声の主はドラン。平吾をこの世界に召喚した上級魔族で、彼にとって本当の契約相手と言える存在だった。

平吾はこの世界メルディアの人間ではなく、地球人だ。三十八歳で非正規用務員といううだつの上

がらない立場で、職場である名門女学院のお嬢様に強い劣情をため込んでいる最低の男だった。そんな平吾の前にドランが現れたのは二日前だ。

安アパートに現れたドランは、異世界で『女神の娘』と呼ばれる若く美しい女を凌辱するという役目を提示したのだ。今後復活する魔王の脅威になる勇者の誕生を防ぐためだという。将来の勇者を生む娘は女神の加護により上級魔族でも手を出せない。そこで女神の娘の子宮に宿る聖なる力、将来勇者に受け継がれるそれを男の欲望で穢して失わせるというのだ。

平吾が選ばれた理由はその欲望の強さと、地球人としての特性だった。

大量の欲望を子宮に注ぎ込むためには女を中イキさせ子宮口を開かせなければならない。だがメルディアの女は愛のない性行為で絶頂することはまれだ。最大の性感帯である子宮口に男の短小なペニスが届かないのが理由だ。

女神が世界のすべてに力を及ばせた結果、男のペニスはだんだん弱くなっていったらしい。

地球の男のペニスはメルディアの男より大きく硬い。メルディアの女を望まぬ絶頂に追い込み、その欲望で子宮を穢すことが出来るというわけだ。

あまりに現実離れた話だったが、頭の中に流れ込んでくる声と映像は本物にしか思えなかった。何より最初のターゲットとして示されたのは、見たこともないほど美しい金髪碧眼の貴族令嬢だった。失うものがない平吾にとって、上級国民のお嬢様すら及びもつかない美姫を凌辱するチャンスは見逃せるはずがなかった。

メルディアに転移した平吾は、ドランに誘導されてこの村、レイティナの前に現れたというわけだ。

ちなみに力は転移時に与えられた魔力で身に着けたスキルだ。

「わかってるって。あのお姫様の子宮にたっぷり中出しすればいいんだろ。任せとけて。くくくつ、あんたの言った通り俺のチンポのデカさに驚いてたしな。だけどよ……」

【なんだ？】

「いや、どうでもいいんだがな。せつかく村人を守っても魔王が復活したら意味ねえんじゃないか。あのお姫様、そんなことも気が付かないようには見えないぜ」

【……女神の娘が知っているのは自分に女神の加護が与えられていることだけだ。勇者は魔王様の復活に合わせて生まれる。先代は千年以上も遡るゆえ、おとぎ話程度にしか伝わっていないのだ】

「ふーん、そういうことね。しかし魔獣と戦わんといかんのは厄介だな。昼間のでけえ狼、お前さんの仲間なんだろ。倒したことはできないのかよ」

【下級な魔獣と我を一緒にされても困る。我ら上級魔族は魔王様の側近。あのような知性無きケダモノではない】

「つまりあいつらは勝手に湧いて、あんたらの言うことも聞かないと」

【そういうことだ。それに他の……いやこれはお前には関係ない。よいか、転移時の魔力はいずれ尽きる。だが女神の娘の聖なる力を穢せばそれは反転してお前の魔力になる。お前がより強い力を得るためにはもちろん、元の世界に戻るためにも必要だということを忘れるな】

最後にそう言い残すと黒い渦は消えた。

「……やれやれ。こりゃあっちにもいろいろありそうだな。まあ俺には関係ねえ。それより明日の夜のお楽しみだ」

何もなくなった天井を疑わし気な目で見た後、平吾は肩をすくめた。

下劣な中年男は高貴な伯爵姫を組み伏せることを想像しながら眠りについた。

第三話 伯爵令嬢の初夜①（♡…クンニ）

夕刻、領主館前の広場に村人の歓声が響いた。角の生えた大熊の首を持った平吾が凱旋したのだ。村を全滅させたであろう魔獣を倒したことへの感謝の言葉を掛ける村人たちの中、栗毛の娘が平吾の前に出た。

「へイゴ殿。レイティナ様が晚餐へお招きしたいとのことです」

アンの態度は伯爵令嬢の侍女に相応しい礼儀正しいものだ。だがその瞳の奥には隠し切れない嫌悪がある。

「そりやありがたい。ちょうど腹が減って仕方がなかったんだ。たっぷりご馳走になるとしよう」

これからこの女の敬愛する主を味わえる、そう思えばアンの軽蔑すら興奮を高めるスパイスだ。平吾は肩をそびやかせて屋敷に入ろうとした。

だがアンは「お待ちください」というと館の裏を指した。

「武勲の証とは言えその姿では。湯殿の用意をしておりますのでまずはお使いください」

「そうだな。何しろお姫様の【おもてなし】を受けるんだ。それくらいは礼儀だよなあ」

平吾の言葉にアンの目のはっきりと歪んだ。

………

湯船につかっていた平吾は、近づいてくる足音にドアを見た。入ってきたのはタオル一枚だけを纏った栗毛の少女だった。アンは後ろ手でドアを閉めると平吾の前に恭しく跪いた。

「お背中を流させていただきます」

「体を洗うのに他人の手を借りるような身分じゃねえんでね。っていうかもう洗っちゃった」

平吾の言葉に身を震わせたアンだが、覚悟を決めたように床に両手をつく。

「お願いいたします。今宵の夜伽は私にお命じください」

「あん？　俺が約束したのはあんたの主だったはずだが」

「レイティナ様には到底及ばぬ下女であることは重々承知しております。ですが精いっぱいお仕えさせていただきます」

謙遜して見せたが、アンは十分美しい娘だ。目鼻立ちは整っているし、タオルから覗く肌はきめ細かい。何より自分を軽蔑する女を自由にするというのは平吾の劣情を刺激するシチュエーションだ。

だが平吾は首を振った。

「もう一度言うぞ。契約はお前じゃなくてお前の主と結んだんだ」

「い、いかなることでもお望みにお応えします。契約が終わった後も幾晩でもお気が済まれるまでお相手いたします。ですからどうか私を――」

「あなたにそのようなことを命じた覚えはありませんよアン」

アンがタオルに手を掛けたその時、ドアの向こうに黒い影が立った。

「ひ、姫様。ですが……」

「わたくしの命が聞けないならあなたを解雇せねばなりません」

レイティナの有無を言わせぬ声にアンはぎゅっと拳を握った。そしてタオルを直すと「ご無礼いたしました」といって浴室から出て行った。

………

「さっきは参ったな。てっきりあんたが身代わりを命じたのかと思ったぜ」

「アンのことは主であるわたくしの不徳です。今宵の夜伽はわたくしが間違はなく務めさせていただきますのでなにとぞご容赦ください」

平吾は食べ終えたフォークを皿に放ると、テーブルの向かいに座るレイティナに皮肉った。ガチャっという音に一瞬顔をしかめたレイティナだが、礼儀正しく頭を下げた。

「そうだな。あんたの誠意はベッドでしっかり確認させてもらおうとしようか」
平吾はにやりと笑った。

レイティナは「ではこちらに」と立ち上がり、階段に向かった。いよいよメインディッシュだ、そんな下卑たことを考えながら平吾はレイティナの後に続く。

ちらっとテーブルを見る。レイティナの皿は全く手が付いていなかった。

目の前で白いスカートに包まれたお尻が揺れる。布越しでも形の良さが分かる若い尻。平吾はごく

りと生唾を飲み込んだ。

昨夜と同じ寝室に入る。改めてみても質素な部屋だ。高貴な姫君を抱くなら相応の部屋の方が盛り上がるというものだが……。

（まっ、この顔と身体なら誤差だな）

改めて今から己が物にできる美貌の娘を見る。しつとりと輝く滑らかなセミロングの金髪。大粒のアーモンド形の碧眼。鼻梁はすっと通っており、薄く上品な唇と細い顎に続いている。女優のような整った目鼻立ちでありながら、大きな瞳と細く高すぎない鼻が十八歳のあどけなさを感じさせる。

ドレスを控えめに押し上げる形の良い若い膨らみ、コルセットなしでも折れそうな腰、そして階段で彼を煽るように揺れた形のいい尻。華奢な女が好みの平吾の理想のような身体だ。

しかも伯爵家の姫で処女。元の世界でお嬢様女子校生を見てきた平吾だが、レイティナほど高貴で清純な雰囲気を持った女は初めてだ。

何よりその気高さが全く違う。内心怯えているだろうに顔を伏せることもなく平吾をまっすぐ見る。弱みに付け込んだことを非難することもない。まともな良心がある男なら、それこそ姫君に仕える騎士のごとくに、無償の忠義をささげたくなるかもしれない。

だが平吾にとってはレイティナのその美点こそがそそのめるのだ。決して手が届かない上流の女を組み伏せることは、彼が三十年以上ため込んできた欲望だ。

「安心しな。しっかり気持ちよくしてやるからよ」

「あなたは契約通り村を守りました。わたくしも契約を果たします。ですが心を開くことは出来ませ

ん」

平吾はベッドの前でレイティナの小さな肩を抱くと、耳元にささやいた。なれなれしい手に身を固めた伯爵令嬢の目に微かな怒りが浮かんだ。

「なるほど。あんたが望まない以上感じるはずもないってわけだ」

「はい。心まで差し上げる契約はしておりません」

平吾はドランの言葉を思い出す。この世界では愛のないセックスで感じないのが常識というのは本当らしい。だがそれが平吾には通用しないことをレイティナは知らない。

だからこそこの『役得』が回ってきたのだ。

「昨夜俺のチンポを見ただろ。この国の男よりデカかったはずだぜ」

「と、殿方のお大事を比べるなどいたしません。もう一度言います。わたくしは契約の義務を果たします。先ほと言ったように誠意をもってお相手するつもりです。それでよろしいですよね」

「強情だねえ。まあ今からしっかり教えてやるよ」

野獣の笑みを浮かべる平吾。レイティナはだまって手を腰に回した。白いドレスには帯がりボンのように結ばれている。微かに震える手が結び目を解いた。

「いい覚悟だ」

平吾は上半身を脱ぎ捨てると、レイティナをベッドに押し倒した。白いシートに横たえられた金髪美少女。シートを握る白い指が震えているのがわかる。如何に気丈に振る舞おうと隠し切れない怯え。可憐な処女の身体に平吾は毛むくじやらの腕を伸ばす。

「まずはおっぱいを拝見といくか」

「っ……」

純白のドレスを引き下げると、スリップのような薄い肌着が露わになる。肩ひもを解くと透明感のある白い膨らみが現れる。仰向けになってもお椀形を保っている。まさに美乳だった。

「さすが貴族のお嬢様。大きさといい形といい上品なもんだ」

舌なめずりをしながら清らかな膨らみを鑑賞する平吾の視線に、レイティナの頬が朱に染まった。

乳房は掌に余るくらいの絶妙な大きさ。下着にこもっていた乳肌はしっとりとして、自然な若い芳香が平吾の鼻腔を誘惑する。小円の乳輪と小粒の乳首。色は可憐なピンクだ。

「くくくっ、感触も最高だな」

「……っ！」

生娘の乳を手のひらでこねると柔肌が指の間を流れる。若い娘特有の弾力と吸い付くような柔らかさの塩梅がたまらない。もまれるたびに上下左右するピンクの乳首が痛ましいほどに美しい。

荒々しさを増す手つきに双丘が思うままに形を変える。きゅっと口を引き結んで耐える若い美貌、汗ばみ始めた柔肌から処女の緊張が伝わってくる。

「さてお味はどうだ」

「ひっ！」

乳房を揉みしだきながら無遠慮に吸い付いた。乳輪に沿うように舌を這わせると、素肌の甘い味わいにわずかな塩味が感じられる。

「ああうめえ。こんなうめえ乳は初めてだぜ」

「んっ！？…んっ…んんんっ」

小さく首を振るレイティナ。女の象徴を賞味されることがよほど辛いのだろう。必死に耐える美姫の清純なふくらみを舐めしゃぶる。舌でピンクの小粒をはじくようにして何度も刺激した後、可憐な突起を吸引した。

ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅーーーっ

「くッ…いやあ…」

悲鳴と共にピンクの先端に芯が生じた。すかさず反対の乳首に攻撃対象を移す。口を広げて乳房にかぶせチュバ、チュバと音を立てて吸い立ててやる。唇で挟むようにしながら先端を舌でこそいでやると、伯爵令嬢は「や、ヤア」とたまらず身体をひねった。

「乳首が固くなってきたぜ。感じてるんだろ」

「ちがいます。ンッ。そ、そんなこと、くうンッ」

目をつぶって首を振るレイティナ。白皙の頬が羞恥と屈辱に染まっている。そんな可憐な美少女の無垢な肌を平吾はこれでもかと舐めしゃぶってやる。

れろ、れろ…ちゅぶ、ちゅぶ、じゅーーッ。れろ、れろ、チュッ

首を振ってイヤイヤするレイティナ。肌はどこまでも甘い。若い乳の味わいを執拗に堪能した後、ちゅぽんっ！という音と共に乳首を解放した。

唾液まみれにされたピンクの先端はピンと屹立していた。

「子供が出来た時の練習が出来たみたいだな」

「……………っ」

勝ち誇る男にレイティナは顔を背けた。

「下賤な男には何も言うことはないってか。だがこっちはどうかな」

「あっ、そ、そこはっ！」

平吾の手がドレスのスカートをめくりあげる。すらりと細く、それでいて女性らしい柔らかさを持つ白いふともがあらわになった。輝く肌は乳房に負けず透明感がある。必死に足を閉じようとする生娘の反応が興奮と期待を掻き立てる。

両ひざに手を掛けると、か弱い抵抗を押しつけるように力を込めていく。汗に湿った太ももの奥に純白のショーツが見えた。怯える尻に手をまわし乙女の守りを引き下げた。

深窓の令嬢の秘花がついに露わになった。

「アアっ。ごらんにならないでっ！」

「おほっ。こんなきれいな割れ目は初めてだぜ」

平吾の目の前に信じられないほど可憐な割れ目が現れた。僅かな綻びすらなくピッタリ閉じた大陰

唇。幼さすら感じさせるその形状は明らかに処女のものだ。

肉唇に指を掛け、無慈悲に押し開く。

「中身はサクラみたいなさ色合いじゃねえか」

「サク……？ いやア、匂いを嗅ぐなんてっ」

開かれたピンクの乙女肉に鼻を鳴らす。わずかな酸味を感じさせる素直な匂いは瑞々しい果肉にふさわしい。

「こっちも味見させてもらうぞ」

「な、何をっ。あっ、そんな、うそ。イヤ、そんなことをなさらないで！」

ピンクの割れ目に舌を伸ばした平吾をレイティナの手が押さえた。恥じらいながらも狼藉に耐えていた姫君の初めてののはっきりした抵抗だ。

「約束を忘れたわけじゃないだろうな」

「で、ですが……そこは……きれいな場所では……」

「んっ？ もしかしてきちんと洗ってないのか」

「ゆ、湯浴みは致しました。ですが……あっ、まって、舌を入れるのは許してっ！」

「ちゃんと美味いから心配するな。お、奥は少し味が濃いかな」

「ん——っ！」

あるかないかわからないほどの小さな膣口、ピンク色の肉穴を舌でなぞってからチュブツと音を立てて舌先を差し込む。羞恥にのたうつ令嬢の細腰を抱え込み、処女の果肉の味見を始める。

花卉の一枚一枚をめくり上げるようにしつこく舐め上げる。ついに舌尖にベールのような薄肉が触れた。

「あつ、あああ。いやあ」

清純な証に触れた乙女がもぐのを両腕で押さえつけ、平吾はクンニを続ける。美姫の肉花を味わう興奮に舌を執拗に動かしてやる。
やがて、

くちゅり、くちゅり……。

ピンクの割れ目から水音が立ちはじめた。中年舌の狼藉により、若い女肉が愛液を分泌したのだ。処女蜜は甘酸っぱく、男を誘引してやまない。舌で抽挿を繰り返しながら蜜をジュルジュルと音を立てて吸い上げてやる。

「素直な甘酸っぱさがいい。こっちの女はこうなのか。それともやっぱり貴族のお嬢様ともなれば違うってわけか」

「どうか、どうかおっしゃらないで。お願いします」

懇願するレイティナ。だがピンクの割れ目から零れる蜜に夢中になっている男をとどめることなどできない。執拗な賞味を続ける野卑な舌に清純な姫花の潤いが増していく。

「アッ、ああああ。イヤーそんな奥までッ」

令嬢が身体を捻るたび蜜があふれ、平吾を楽しませる。ジュールジュールと音を立てて愛液を吸い取ると、白いうち太ももがビクッビクッと震えるのが艶めかしい。

何も知らなかった処女に性の快感を教えていくのがたまらない。

「ああ……。ダメ、ダメです、も、もうやめてえ……。…」

ついに諦めたようにレイティナの足から力が抜けた。

平吾は最後にジュールジュールと吸い上げた後、ようやく割れ目から舌を抜いた。

「よしよし。しっかり準備は出来たな」

白い恥丘の中央、わずかにピンク色を晒した小陰唇がびくびく震え、唾液とは違う滴りがシートに落ちていく。

中年男の執拗な舌責めに若い体が応えてしまったのだ。可憐で淫靡な花びらに、平吾のペニスがギンツとそそり立った。

「じゃあ頂くぜ。お姫様の大切な初めてをな」

平吾はガチガチになった一物を握り、劣情のままレイティナにのしかかっていった。

*****体験版はここまでです*****